インフル・はしか…別の感染症増加

マスク着用で免疫低下か

5類に移行した新型コロナウイルスの感染対策が平時へと戻る中で、インフルエンザなどの風邪症状をもたらす感染症が季節外れの流行を見せている。コロナ禍での免疫低下の影響に加え、水際対策の緩和に伴って海外からの流入も懸念される。専門家は「生活習慣を見直しながら、失われた免疫を取り戻さなければいけない」と指摘する。

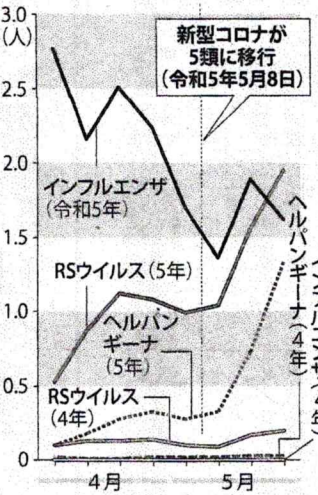
季節外れの流行に

浜松市の女性(56)は5月10日頃から喉が痛くなり、鼻水やたんなどの症状が出始めた。病院ではコロナやインフルではなく一般的な風邪と診断され、「今年の風邪は喉が痛くなる人が多い」と告げられた。症状の回復までに約2週間かかったという。

「いとう王子神谷内科外科クリニック」(東京都北区)では、コロナ疑いを含め風邪症状を訴える患者が1日30～40人受診。5類移行前の約1・5倍に増えており、伊藤博道院長は「コロナが急増している実感はないが、広義の風邪患者が多く、免疫が弱まっていると重篤化もする」と話す。

季節外れの流行が続いているのがインフルで、今年は5月に入っても各地の学校で集団感染が確認されている。国立感染症研究所によると、5月22～28日に全国の定点医療機関から報告された定点当たりの患者数は1・62人。流行の目安の「1」を上回っている。

一方、乳幼児を中心に夏に流行するRSウイルスとヘルパンギーナは、前倒しで患者が増加。5月22～28日の定点当たりの報告数はそれぞれ1・95人、1・33人で、5類移行前の同1～7日の報告数(0・99、0・28)からRSウイルスは約2倍、ヘルパンギーナは約5倍になっている。



インフルエンザなどの1定点当たりの報告数は昨年を上回る数値で推移している

※国立感染症研究所の集計に基づいて作成

風邪患者増加の一因とされるのが、コロナ禍でマスク着用を徹底したことなどによる免疫の低下だ。複数のウイルスに続けて感染することもあり、同院では4～5月に3回発症した患者がいたという。

伊藤院長は「3年間の〝過保護〟生活の反動で、さまざまな感染の波が生じている。食事や睡眠など基本的な生活習慣を見直し、失われた免疫を取り戻さなければいけない」と訴える。

東京医科大の濱田篤郎特任教授(渡航医学)も「コロナ禍前は、日頃からウイルスにさらされることで免疫を獲得していた」と説明。インフルは今後流行が落ち着くとしつつ、「マスク着用の緩和と国際交流の活発化で季節外の流行につながった」と分析する。

5月で前年上回る

海外からの流入が特に懸念されるのが、非常に感染力の強いはしかだ。4月下旬に新幹線の同じ車両に乗っていた男女3人の感染が判明、うち1人はインドから帰国していた。感染研によると、今年は5月28日時点で関東と関西計10人の感染報告があり、昨年1年間の感染者数(6人)を上回った。

感染予防にはワクチン接種が最も有効だが、コロナ禍の受診控えなどで、定期接種を受けた子供の割合は低下傾向にある。濱田教授は「途上国ではコロナ禍で接種率が下がり、大流行につながっている。空気感染するはしかは通常のマスクでは防げず、ぜひともワクチン接種を受けてほしい」と呼びかけた。(深津響)